

阪大キャンペーン・母校訪問プログラム 大分県立中津南高等学校訪問

高部英明（レーザーエネルギー学研究センター）
takabe(at)ile.osaka-u.ac.jp

（本報告書は10年9月24日（金）、母校を訪問し、高校生に講演をした際の報告である：
10.09.26/10.09）

1. 中津駅前にて

暑い異常な夏がどうも急に秋に移行しそうです、と天気予報が伝える中、どんな格好で訪問したらいいのか迷いつつ、九州の母校訪問に出かけた。9時頃に家を出て、新大阪で買い物をし、1時頃には中津に着いた。私が阪大生当時は、山陽新幹線も開通しておらず、帰省するときは昼間急行で10時間ほどかけてたどり着いたものだ。40年も前の話。子供に笑われる。今は小倉まで2時間半、その後、特急「ソニックブーム」で30分である。

高架になった駅に降り立つと周りの風景がずいぶん変わったように感じる。駅の南にはホテルが乱立している。近くにできたダイハツの大規模な車生産工場関係の出張者を当て込んでホテルができたが、リーマン・ショックによる景気後退で、見込み通りの客を迎えることができてない様子であった。典型的な地方都市の現状では無かるうか。

2時半までには高校に着く必要がある。昔の記憶をたどりながら歩いて行くことにした。子供の時は長い道と思えたところも、年を経るほどにコンパクトに思えてくる。ホテルの前に大きな看板のパチンコ屋がある。後

で同級生に聞いたら「こちらでは、定年退職した人は、家にいても粗大ゴミ。かといって仕事をしていたときに趣味を見つけたわけでもない。すると、てっとり早いのがパチンコ、となるようだ」とのこと。確かに、家で悶々とするよりは日本のGDP向上への貢献になるだろうが、何とか地方行政は彼らの第2の

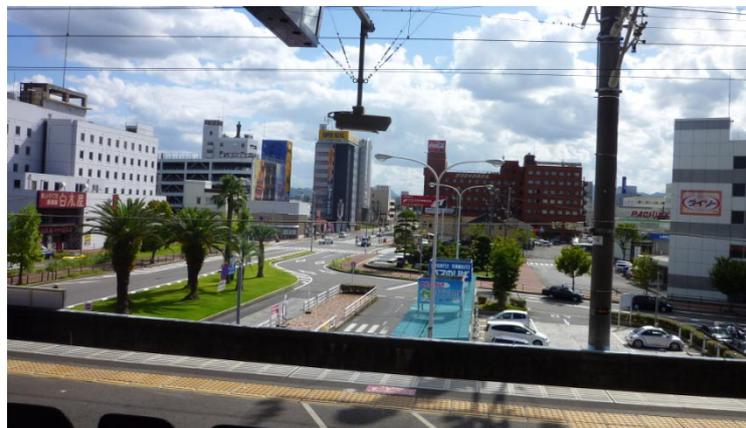


図-1: JR 中津駅前のプラットフォームから北方向を写真に納める。ホテルがたくさんできていた。

人生を支援できないのだろうか。

定年になったらボランティアで云々、といっても、恥ずかしがり屋の日本のおじさん達は自分から何か始めたり、既存の組織に入ったりは苦手である。そこで、役所が知恵を絞り、彼らの活力を社会福祉や子供達との世代間交流など企画して、むずがるおじさん達を参加させる。最初は戸惑う人たちもそのうち、参加しないと寂しい気持ちになっていく。団塊の世代が一挙に退職していく中、中津で最初を感じたことが、働き蜂で働くことしかできなかったお父さん達の第二の人生だ。この国は彼らの生活の質をどんなに豊かにしてくれるのか、市長や知事はしっかり考えているのだろうかと考えてしまった。

2. 母校訪問

駅前から 10 分ほどで母校に着いた。校門を入るとジャージ姿の高校生がたくさんいる。目を私に合わせながら挨拶をしてくるので、その元気の良い声にこちらが戸惑う。大学ではあり得ない情景だ。礼儀挨拶をしっかりと教えられた生徒達も、大学に入学して無言の学生集団に遭遇し、逆に驚くのだろう。この 1 月に完成したという職員室のある建屋の玄関に入る。

コンタクト・パーソンであった御旗先生に迎えられる。阪大の数学出身で私より 2 年後輩とのこと。校長室で小林校長と面談。スーパーサイエンス (SSH)[1：以下括弧内の数字は最後の参考文献の番号]の事など話すが、SSH を希望はするが、理数科コースのある高校が優先だそうであきらめているとのこと。大分は舞鶴高校が SSH に指定されている。私の玉島高校での SSH などの経験をお話しする。SSH はプレゼンテーション能力の向上に力を入れるので、SSH 教育を受けた学生は何事にも動機付けが植え付けられ、大学に入学しても入学時に成績は悪くとも学年が上がると頭角を現す傾向がある。日本の初等中等、高校含み教育で「自主性」「動機付け」「表現力」など教えているのだろうか。SSH が大切にする、自分から考える・意志決定する・行動するという教育をいかに植え付けることができるかが日本の教育の課題であろう。

3 時から体育館に集合した 1, 2 年生を前に講演を 90 分することになっている。私が彼らに一番伝えたいことは次のようなことであった。受験勉強は大学で自分自身を見つけるために必要な登竜門と考え勉強してほしい。そして、大学に行ったらあらゆるジャンルに恐れることなく挑戦して、自分は人生を通してどんな生き方をしたいのか、自分とは何なのか、自分探しの時間をもってほしい。高校の延長で与えられた勉強をこなすのではなく、講義をさぼってでも視

野を広げるための読書や旅行、友人付き合いなどを大学で楽しいでほしい。その様なことを自分の学生時代を振り返りながら講演をした。



図-2：体育館一杯に座った1、2年生を相手に、前半は研究の話、後半は私の高校から歩いてきた道を中心に講演した。「受験必勝法」を期待していたかも知れない生徒達はどんな印象を持ったのだろう。

くさんいる。その典型例が大学院のあり方である。大学院重点化で院生の量が増えた分、質が低下していることに対してどのような新たな教育方針で臨むか10年以上経っても新しい方針なり理念を大学人はだし得ていない。昔のままの専門家育成を続けている。その結果が3万人にも達しようとしている大量のポスドクの問題となり、社会問題化している[2]。

大学人にとっても今の価値観を正しく認識し、組織を変化させていくことは至難の業である。ましてや、10年先にはこうなるはずだから、こんな準備を今からしておくべきだ、と言っても耳を貸す人はほとんど居ない。今を生きるのに一生懸命なのだ。私はレーザー宇宙物理学という15年前に提唱した研究領域が現在、世界中に広がっている現状を説明。米国、欧州、中国の仲間と協力しながら世界最大の巨大レーザーNIF(米国リバモア研)を用いた実験の話題を紹介した[3]。連携できる友人を世界中に持つことの楽しさ、それが大きな力になる現実。宇宙の超新星爆発現象を実験室で再現して物理を解明するという、高校生には想像つかない内容であるが、敢えて話したのは「君たちの自分探しの人生の中でそんな出会いが待っているかもしれないよ」と伝えたかった。大いに期待しなさいと。

講演の題目を事前に聞かれていたので「大学・人生を通して科学を学ぶことで君たちは心豊かな人生を送ることができる」としていた。まずは、自分が進めている科学研究の話から始めることにした。ある自己紹介に「趣味は10年先の世界を考えること」と書いたことがある。現在何が重要か、何をしなければならぬか。科学者でも過去に引きずられて、現在もよく見えない人がた

自分史に戻り、中津という狭い世界から、今日、世界中を駆け回る日々に移っていった経緯など話した。その際、私の尊敬する福沢諭吉の例を出しながら「中津には私 100 年以上前に航空機もない時代に自己の世界を広げていった先人がいる。福沢諭吉」と、彼のことを「福翁自伝」[4]から引用しながら紹介した。福沢諭吉は「封建主義は親の敵」と書いて、19 才で中津を出た。私の気持ちも通じるところがある。彼は 20 才から 4 年間、大阪大学の前身である「適塾」で勉強をし、塾頭にもなった。そして、江戸に向かう、つまり、教えるために東京に向かった。

江戸住まいのある日、横浜に行ってみると諸外国の店が多数並び、貿易が賑やかであった。そこで気がついたことは、外国語は自分が勉強してきた蘭語ではなく英語が席卷していたことだ。そこで彼は「蘭語の時代ではない、これからは英語の時代だ」と悟り、英語の勉強を始めた。蘭語の知識があったので英語の習得にはあまり困らなかったと書いている。この柔軟な思考が福沢の当時としてはまれな人物たるところである。『福翁自伝』には官軍が迫る江戸城での慌てふためく同僚を揶揄している記述がある。「徳川の末席の役人とはいえ、こんな戦争で死んでどうします。私には戦後のこの国を担っていく若者を育てる使命がある。戦争が始まりそうなら教えておくれ。ケツをからげて逃げるから」と。当時の武士あるまじき振る舞いも、10 年先を見る福沢らしい。



民主主義国家と言いながら本当の民主主義が何かまだまだ国民の大半が知らないこの国で、100 年以上前にその本質を理解したのが福沢諭吉。たぶん、日本ではじめに民主主義の概念と、形の上での民主主義ではなく、それを支える国民に「学問のすすめ」を説いて、民主国民の必要条件を説いたのは彼の慧眼であった。彼の若かりし頃と自分をダブらせながら、高校生に「目先の役に立つとか考えずに、漠とした自分の未来を考えながら、目的もなくがむしゃらに勉強できるのは大学生の特権。この時期を大切にし、自分とは何か、自分の潜在能力は何なのか、掘り下げる自分探しの時間を持ってほしいと」と何度も強調した。

校長による丁寧な自己紹介の後、こんな話を 90 分続け、最後に教育・社会

貢献としての国際物理特別コース[5]の紹介など、日本の大学のグローバル化への取り組み、大学の迫られている変化など説明した。講演の少し前に「私は阪大の宣伝も任されているのだ」と気がつき、上海交通大学の留学フェア[7]で使った英文の大学紹介から抜粋し、阪大への入学を呼びかけた。

質問の時間、一人が「阪大に入るために先生は高校時代何時間勉強していたのですか」と高校生らしい質問があった。私はあまり覚えていない。そこで「単調な生活の高校時代。たぶん、勉強優先の日々であった。当時は4当5落などという標語があり、4時間に睡眠を削って勉強した生徒は合格。5時間は不合格のような不条理な標語があった。思い出すに、勉強は集中力の問題であり、眠い眠いと思いながら勉強しても身につかない。私の場合、3年になった頃から集中して勉強したが、国語、英語は苦手嫌い。好きな勉強優先だった。得意科目の数学・理科が配点の多かった阪大を選んだのも苦手を克服できなかったから。でも、今は、英語は研究遂行に必須。語学は必要になって勉強すればいい、が私の信条。むしろ、必要になっても勉強しない人が多い現状は受験勉強の弊害と考えている。大切なことは入学試験の頃に勉強の成果が出てそれが実力になるように、早すぎず、遅すぎず、3年のはじめ頃から全力で勉強することでしょう」のように答えた。

3. 進路指導相談

講演を終え、進路指導室に場所を移し、阪大希望の3年生2人と、参加したいという1,2年生3名を相手に、彼らの質問に答える時間を30分ほど持った。3年生は何学部の何学科を希望とすでに進路を決めており、その気持ちを尊重。一人は数学科の入試を受ける。動機は数学の先生になりたいそうだ。教員免許を取って高校生に数学を教える。先輩の御旗先生が教える姿が格好良く見えるからかも知らない。「それはすばらしい選択だ」と、私。もう一人は基礎工学の情報学科を受験希望。ネットで調べたがどんな研究内容かよくわからない。そこで持論「情報の世界は自然科学と異なり、人間がルールを決める。だから、理系とはいえ、法学部に近い気がする。私のイメージはこんな所だが情報と言ってもいろいろあるので、どの研究室に行きたいか調べてみたらいいのではないか」と彼には勧めた。

二人には「4月に豊中キャンパスで会えたら食事でも一緒にしましょう」と誘う。「僕をがっかりさせないように食事をおごらせてね」と。1,2年生含め「最近の理系は皆、大学院に進学するそうですが、進学は必要ですか」と質問された。大学院重点化の歴史から、大学教育が理系の場合、今や、6年教育に変

遷している現状などを説明した。その他、阪大の URL[7]を見ながら阪大の紹介をした。彼ら自身、クリティカルな質問事項があると言うより、何となく、大学の雰囲気に関心があるという気持ちでの参加でしょう。それで良いと判断し、ジョークを含めた雑談をして時間を過ごした。

4. 友人との会食

大阪で製薬会社に長く勤め、3年半ほど前に夫婦で中津に戻った友人がいる。今回私が中津に来ると言うことで、仲間を何人か集めて夕食を共にしようと勧めてくれた。ホテル近くの料亭「鬼太郎」にて、5名で夕食となった。卒業以来、初めて顔を合わせる友達や5年ぶりの友達も。高校卒業して40年、どんな話になるのかと思いきや、皆々、最近の仕事の話や社会福祉、3面記事から日中輾轉。会話の途切れることのない時間が過ぎた。話を聞きながら、「皆うまく年を取っているな」と感心した次第。年を取るのも、まんざら悪いことではない。3時間以上、座敷を借りて話が尽きぬ夕べを過ごすことができた。友人達に感謝の気持ちであった。



図-3：同級生と。前列向かって右から大家（高校教師）、高部、野見山（家業を継いで社長）、後ろ、菊池（福祉関係）、竹内（病院）

参考文献・URL

- [1] SSH(JST)に関しては <https://ssh.jst.go.jp/>
- [2] ポスドク問題：例えば以下の記事や「検索」に「ポスドク 物理学会誌」を入れる。2年を経過した記事は自由にダウンロードできる。
<http://ci.nii.ac.jp/naid/110006825822>
- [3] 米国リバモア研究所の巨大レーザー利用審査会報告
<http://homepage2.nifty.com/AkiTakabe/kaigaiinshouki/06-/10.1.pdf>
- [4] 福沢 諭吉（著）「新版 福翁自伝」（角川ソフィア文庫）
- [5] 阪大国際拠点事業
<http://www.osaka-u.ac.jp/ja/guide/international/global30>
- [6] 上海交通大学で留学フェアを主催、その報告書：
<http://homepage2.nifty.com/AkiTakabe/kaigaiinshouki/06-/09.1.pdf>
- [7] 阪大HP：<http://www.osaka-u.ac.jp/>